

## 真言宗史の研究

——覚鑱・頼瑜の伝統と根来山——(I)

徳 永 隆 宣

覚鑱上人滅後の根来山が、新義真言の祖山として現在に至るその基は、俊音房頼瑜とそれに続く学匠の尽力に他ならない。鎌倉時代も末期に近い正応元年(一二八八)に、頼瑜は高野山より根来山へ大伝法院并びに密嚴院を移転したとされる。「その後、陸統として高野を離れ、根来に引き移る学侶数多なり」と後世の記録に示されるように、中世根来山興隆の根幹を成す「子院」の多くは、頼瑜以後の時代に形成されたものである。

中世根来山は論義の談所という。根来寺中性院の第四代定林房聖憲が、「大疏」「釈論」の第二重・三重を百条に定めて論義の集大成をした。その後、室町時代も末に近い文明の頃、十輪院の玄音房道瑜が学頭として所化を薫育し、それ以後における新義論義の形態を確立したことは「塵塚」等に見ることが出来る。根来寺において「能化」の称号を唱えたのは、この十輪院の道瑜が最初ともいわれている。

頼瑜・聖憲・道瑜の伝統はさらに、永禄(天正年間)に学頭能化として活躍した智積院の玄紹房日秀と、小池妙音院の定識房頼玄に受け継がれて、その結果新義真言の分立が確立された。ここに智積院・小池坊を頂点とする新義真言宗の本山意識と、智山・豊山二分意識が展開することになる。

天正十三年(一五八五)三月、秀吉の根来・雑賀攻めによって、根来山は壊滅的打撃を被り、往時の盛威を再び

取り戻すことはなかった。大和の長谷寺小池坊に宮賢房專誉が、京都東山豊国の智積院に亮性房玄宥が、それぞれに法幢を再興し、近世新義真言宗の両本山として新たな展開を見たのである。

覺鑊上人の伝統が、頼瑜とそれ以後の根来山、そして近世新義真言宗へと、どのような形で継承されたのか興味は尽きない。中世根来山にあつては、開山である覺鑊上人の廟所を中心とする遺蹟意識と、頼瑜自身の覺鑊投影意識が生な形で承け伝えられたであろう。しかし、根来山滅亡後の近世新義真言宗にとっては、覺鑊上人も根来山も、宗団形成上における象徴としての「先徳」「祖師」であり、「祖山」にすぎなかったのではなからうか。根来寺の法幢を再興した智積院・長谷寺小池坊が教相本山として位置付けられたにしても、敢くまでも、頼瑜に関わる中世根来山の先徳学匠が形成確立した論義の伝統場としての位置付けであつて、覺鑊上人の伝統継承には程遠いものがある。近世新義真言宗の意識の底流には「祖師頼瑜僧止」があり、強いて系統立てれば、頼瑜を通じた覺鑊の伝統と見ることができようか。その最たるものが「中性院」の称号相続と、その法流相承意識であろう。また、豊国智積院第四世の元寿能化が伝法院流を相承し、「智山伝流」を興したのも、中性院意識の延長線と見ることができよう。

中世根来山における覺鑊上人の伝統との関わりを示すものに「根来寺教相血脉」がある。この血脉図には諸本があるが、長谷寺所蔵「根来寺教相相承之次第」（「根嶺教相血脉」）を示す。（巻末参照）

これは近世初期に整理されたものであるが、覺鑊に始まって、小池坊專誉・智積院玄宥で終えている。根来寺の学頭系譜といったものであろうか。覺鑊上人以来の相承系譜とはいえ、ここには頼瑜を位置付ける意識として、法流血脉作成意識と同じように、「開基」「中興」といった形で認識されていたことが明確に示されている。

根来山における覺鑊上人の伝統は、敢くまでも頼瑜の意識を通じたものとして、相当古くから根来の地に根付い

ていたのではなからうか。それでは、頼諭に伝承された覺鑊の意識とはどのようなものであったかという、数少ない頼諭の研究書にも明確な答えを見出すことは困難である。従来の研究者に共通することは教学上の関わりからみた、一方通行的な視点にあって、時代における共通した人間の生き様の中から、覺鑊上人と頼諭を論じた研究論文を見受けることができないのは著者の不勉強でもあらうか。

覺鑊上人と頼諭には、平安末期と鎌倉中期というように生きた時代の相違はあるが、それぞれが生きた時代の社会状況の中には、時代を超越した共通点が多々ある。当時の一〇〇年や一五〇年の時代推移は、現在の社会状況とは遙かに異なって、それ程の相違はなく、もっと自身に共通した認識として頼諭の覺鑊観があったのではなからうか。そういう視点からも、平安く鎌倉期の真言宗史を、また日本仏教史には一考の余地が多々あるのではないかと痛感する。

先年、智積院の藤井龍心能化よりご教示された史料に「中性院伝来舍利之事」と記された二通の文書の写しがある。

一は、

正応二年三月十六日、仏舍利一粒(二八七)、可奉頼諭阿闍梨也、自本願上人門跡相承、異他種可致秘感矣

権僧正禪助(花押)

とあり、二は、

仏舎梨一粒

右祖師覺洞院僧正勝覺、開東寺宝菩提院奉渡之内也、僧正被讓実継座主、其後、良海僧都・憲深僧正・実深僧正・覺雅法印・憲淳次第相承敢無違失、且為報師恩、且為酬懇頼所奉渡之状如件、

(二九〇)  
永仁四年六月廿日

伝法院学頭僧都御房禪

法印権大僧都憲淳(花押)

とある。禪助と憲淳は、仁和寺・醍醐寺にあって、それぞれに嫡流の相承者として、後宇多院の附法の師となり国師と称された。頼瑜が双方から譲り受けた仏舍利は、弘法大師の「御遺告」に見られる「如意宝珠」の意識であるが、「野沢」の嫡流より相伝されていることに、頼瑜の意識を窺うことができよう。

禪助より覚鑠上人伝来の仏舍利を譲り受けた正応二年は、頼瑜が高野山上から下って大伝法院・密厳院を根来山へ移した翌年である。「付法相承血脉鈔」によると、「伝法院流」について、

第十八代 上人覚鑠号正覚房

第十九代 上人兼海号浄法房

第二十代 法印隆海

第二十一代 権少僧都覚尋

第二十二代 阿闍梨尋海本名賢譽

第二十三代 法印覚禪

第二十四代 法印経瑜、二位法印、号真光院法印、又号南勝院、月日随覚禪法印、受法灌頂、并定瑜法印相

承ノ法流悉伝持之、覚鑠上人本尊道具并聖教等大略在此ノ門跡云々、

第二十五代 前大僧正禪助、初者経瑜法印入室弟子、仍門跡並当流悉次第相承、(中略)即任伝法院座主、付法流、門跡相承故也

とある。覚鑠上人より兼海、兼海より隆海と伝えられたその法流や本尊・道具並びに聖教類は、悉く仁和寺真光院

の経諭が相伝し、さらには禅助へと相続されたのである。前述した正応二年の文書は、覚鑿上人相伝の仏舍利を仁和寺の禅助僧正より頼諭が譲り受けたことを示すものである。

数多な衆徒を引き連れて根来山へ移転した頼諭にとって、成すべきことは、覚鑿上人滅後一五〇年を経た状況下において、荒れ果てた根来山の復興を期したと考えられる。勿論のこと推測の域を出ないが、高野を離れ根来の地へ大伝法院・密厳院を移転するには、従前より用意周到な準備が成されたであろう。

当時の社会状況において、紀伊の小豪族の出自に過ぎない頼諭が、醍醐寺中性院を相続し、さらには高野大伝法院の学頭となるには並大抵の苦勞ではなかった筈である。類まれな能力を認められた上での人脈は、醍醐寺は勿論のこと、仁和寺や石山寺など、当時の有力寺院へ広く及んでいたと思われる。

禅助よりの仏舍利譲りも、その人脈を駆使して働きかけた結果であろう。後世根来寺中性院の聖教・道具目録より推察しても、この時前後に、仁和寺真光院相伝の覚鑿上人所持の聖教や道具類の譲りもあったのではと推察される。

頼諭にとって覚鑿上人は、己の出自経歴を考え合わせると格別な存在にであったとも考えられる。

覚鑿上人を根来山のシンボル化する上で、その遺物は根来山経営上不可欠なものであったことも否めない。しかし覚鑿上人の遺物は敢くまでも経営上の付加品であって、頼諭の目指した覚鑿上人意識の伝承は別にあつたと考えられる。

根来寺中性院は、中世根来山にあつて格別な寺という。頼諭・頼淳・増喜・聖憲・聖増・聖融・聖覚・澄政・融澄・道澄・道傳・聖空と、天正十三年の根来山滅亡に到るまで歴代相続されてきた。根来寺破滅後の根来教団形成時における地方談議所や所化にとって、中性院は根来寺の象徴でもあつた。それが文禄年間に聖空より長谷寺小池

坊第一世專誉へ譲られ、以後、專誉は中性院の称号を用いている。慶長十三年（一六〇八）に第二世性盛が寂するに及んで、後住諍論が起きる。その時、中性院相伝の秘物を納めた二ヶの箱、通称『黒皮籠』が持ち出されて、京都東山豊國の智積院へ搬入されたという。智積院第二世祐宜能化の代である。そして、これが所謂『黒皮籠相承の諍論』となって、暫くの間、智積院と長谷寺小池坊の出入りとなり、中性院流の正嫡諍論に発展する。

智積院第三世日誉能化は徳川家康の裁許を得て、黒皮籠の相続と中性院流の正嫡を末派寺院に広告し、以後智積院の歴代能化は中性院を名告り署名していることは周知の如くである。

智積院能化に相伝された中性院の正嫡法流は、能化の唯授一人相伝として、黒皮籠と共に現在に至るまで智積院に伝わってきた。この黒皮籠に納められた秘物とは何か。能化一人披覽という伝統上、その内容を知ることができない。雑記には、覺鑊上人の遺物と頼瑜の意識を示す物があるというが定かではない。

埼玉県桶川市に智山派の明星院という古刹がある。御室仁和寺の直末寺で、多数の末寺と数多の聖教を有していた。明星院は、近世新義真言宗史上避けて通ることのできない寺でもあり、且又、著名な学匠を生んでいる。中でも浄空は智積院の第二十世能化として、事相の著名な学匠でもあった。この浄空が智積院の秘庫中より持ち出したと記した南北朝期の小巻物がある。

これは、頼瑜相承の法流で、根来寺中性院初期の相伝形態が窺えるものであり、これより頼瑜の意識と中性院流の基本的意識が理解できるのではないかと考える。そこで以下に紹介することにする。

卷一 成就院 根来寺

伝法灌頂印信

胎 外五古印

升命 五重

金 塔印

升命 五重

胎 外五古印

升命 五重

金 塔印

二重

升命 五重

胎 外五古印

金 塔印

三重

胎 外五古印

金 塔印

四重

胎 外五古印

金 塔印

五重

正慶二年西五月九日

伝授阿闍梨権律師法橋上人位頼淳

(自書)

血脉

大日如来乃至 大師

真雅

卷一 成就院 密嚴院方

源仁

益信

寬平

寬空

寬朝

濟信

二品親王

寬助

信証

琳助

心蓮

寬琳

明任

法性

信阿

信範

真空

隆盛

賴瑜

賴淳

增喜

聖憲

聖增

增喜大法師

授印可金剛名号

胎藏界

外五胎印 満足一切智智五字明

外胎印

金剛界

大率都婆印

普賢一字明

大率都婆印



金剛名号

遍照金号

右正慶二年歲次癸酉五月九日辛丑再宿今有婆奇世界南瞻部州大日本国紀州根来寺灌頂道場授向部伝法灌頂職已畢

傳授阿闍梨權律師法橋上人位頼淳(自署)

大阿闍梨位印言

二手合掌二中二水屈背合入掌

真言曰

字字字字字字字字字字

右印言在瑜祇經後日授之 秘密之故普通不授之也

師云 阿闍梨位印明者是常所行也

初重 院五重灌頂印明事

台界 五古印

升履之志道

金界 塔印

歸命道

二重 台界 塔印

引野貞殊

金界 外五古

引野貞殊

三重

台界 大日鈿印

引野貞殊

金界 同印

引野貞殊

引野貞殊

四重

台界 金剛宝蔵印

引野貞殊

引野貞殊

金界 同印

五重  
第九印

台界 引

金界 き

開引野台開き金

已上五重畢

血脉

大日如来 乃至

弘法大師 日本高祖

真雅僧正 号真觀寺僧正

源仁僧都 号南池僧都

益信僧正 号円城寺僧正

寬平法皇 字多院

寬空僧正 号蓮台僧正

寬朝僧正 号広沢僧正

濟信僧正 号喜多院僧正

二品親王 大御室

寬助大僧正 号成就院僧正

寬鑾上人

兼海院主

隆海法印

覺尋僧都

定尋律師

隆盛大法師

賴瑜阿闍梨

賴淳律師

增喜阿闍梨

聖憲僧都

聖增大法師

正平十七年 壬子

黃

十二月二日

癸花酉

今有婆奇世界南膽部州大日本国紀州根来寺灌頂道場授南部伝法灌頂職已畢

伝授阿闍梨權大僧都法印大和尚位增喜

永和二年 丙辰

辰

五月九日

壬戌

今有婆奇世界南膽部州大日本国紀州根来寺灌頂道場授南部伝法灌頂職位畢

伝授阿闍梨權少僧都法眼和尚位聖憲

卷三 成就院 真光

(一)成就院 密嚴院方

增喜阿闍梨

授印可金剛名号

胎藏界

外縛五貼印 満足一切智々五字明

金剛界

大率都婆印 普賢一字明

イホイイイイイイイイ

金剛名号

遍照金剛

右建武元年才次申巳五月六日癸張宿水曜

於根来寺中性院授両部伝法灌頂職位畢

阿闍梨權少僧都頼淳

大阿闍梨位印

巳上一帯

二手合掌二中二水屈背合入掌

真言曰

字イアサササササササ

右印言有瑜祇経後日授之、秘密之故普通所授之也

巳上一帯

血脉

大師乃至

覚鑊上人密嚴院

兼海院主浄法房

隆海法印 釈迦院 覺尋僧都 仁和寺池上 經尋阿闍梨

覺禪阿闍梨 禪定院 經瑜法印 仁和寺真光院 賴瑜阿闍梨

賴淳僧都 增喜律師

(一)成就院

印信 閑觀房

種子 台月又我 三形 台金同五輪 尊形 如常

外五 列列列列列 加 三 塔印 又刀印云々 △法皇用一字云々

已上初重六帖所載實朝僧正永祿元年於遍照寺所授明信印明同之 惠大真源 賴禪實元仁 是第二重歟 合爪少相並去二空

一印塔 有開台二重 列列列列列 (重果・大師真雅・源仁・聖聖・觀賢・淳祐・元泉・仁海)

已上々人籠去之間、於密嚴院受之 惠大真源聖觀淳元仁云々

第三重 答開二空戸、即其二入答中、而並立、觀理智法身、境界一切如來、……者五仏也、此諸仏放五智光明、

照我及以法界衆生無明菩薩黑闇、永除生死業垢頓証仏果菩提

心 我覺 本不生 出過 諸過 遠離 知空 等

第五古金剛杵下閑普賢一字明 印明共在輪藏 可想五結一即成五仏

第四重 前印也、但以二附二本背二、並立二火中間、是即普賢一字心後更亦入金剛界道場微細金剛等同一昧性

師曰、文字有口伝也、又云、此印不用真言、只是諸尊成同一昧意也

第二三四重輒勿授之

義也 文在 大日金剛等是也

次秘密之重

塔印三二水、又是也、五古印明塔印是一也 卜習、五峯金剛光明心殿卜存也

血脉

大日 金薩 龍猛 龍智 金智 不空

惠果 弘法 真雅 源仁 益信 法皇

寬空 寬朝 濟信 性親 寬助 覺鑣

証印 玄証 房海 覺禪 經瑜 賴瑜

賴淳 增喜

御記云

文永五年七月十日巳未冥宿午尅、於高野山花遊院御持仏堂、從法印御房奉伝受了

金剛仏子生年賴瑜三

建武元年五月六日伝受之、同十日中性院御自筆本書写之畢

金剛仏子生年增喜三

右正平十八年才次癸卯壬正月二日癸酉冥宿、於根来寺中性院授向部伝灌頂職位已畢

阿闍梨權大僧都法印增喜

右永和二年才次丙辰五月十日癸危宿、於根来寺金剛台院向部灌頂職位聖增仁授之

阿闍梨權少僧都法眼和尚位聖憲

中性院御記

文永五年戊辰五月廿一日辰冠賜法印御房御札、即令參上之處被仰出云、密嚴院流諸尊法等隆海法印記有之、然而散髮不調首尾汝為筆授再治、為備後第龜鏡即令開箱ヲ令授阿ミ夕法等給畢、大師明神冥助所致歟、重仰云、可賜印

可之由蒙仰畢 (以下略)

卷四 成就院本幢

(一) 成就院密嚴院

印信

賴瑜大法師

授印可金剛名号

胎藏界

外五古印 満足一切智々明

列レ々レ本レ清

金剛界

大率都婆印 普賢一字明

金剛界

大率都婆印 普賢一字明

不レレレ々レ々レ有レ有レ有レ有レ不レ々

金剛名号

金剛瑜

右文応二年正月十三日、今在南閻浮提大日本国山城国木幡觀音院灌頂道場授与伝法灌頂職位已畢

伝授阿闍梨菩薩戒比丘真空在御判

已上一番

血脉

一 大日如来 乃至

源仁 号南池僧都

寛空僧正 号蓮台僧正  
又香隆寺

二 二品親王 大御室

兼海院主 名淨法房

定淨律師 号大納言律師

頼瑜大法師 入寺

已上一系

秘密印信

二 台界

無所不至印

金界

外五古印

三 台界

大日劔印

金界

同印

弘法大師

益信僧正 号内城寺僧正

寛朝僧正 号弘沢僧正

寛助大僧正 号成就院

隆海法印 号大夫法印

隆盛大法印 号良悟房

真雅僧正 号貞觀寺僧正

寛平法皇 宇多院

济信僧正 号喜多院僧正

寛鑲上人 伝法院本願

覚尋僧都 号池上僧都

真空上人 号迴心房律師

實法無所不至

引真無所不至

引真無所不至



口伝云大日劔印者三摩耶大日印也

四  
台界

金剛宝蔵印 口伝云此印大日如来持

金界

同印 此印大日如来持此印

五  
口伝云、虚心合掌シテ以三二頭指押三中指背二大指並立入三二中指間也

第九印

台界 九 金界 ぎ

開 九台 開ぎ 金

隆海法印先師示云、於自門他門雖有異說不同□之馬極且見先師灌頂上大一異義文而已

(二) (端裏) 口伝云、第九印者結テ三率都婆印外五古印誦テ明テ也、此說同成就院五重矣

成就院密嚴院

賴瑜大法師

授印可 金剛名号

胎蔵界 外五古印 九台 ぎ

金剛界

大率都婆印

ミ

金剛名号

金剛瑜

右文応二年正月十三日、今在南閻浮提大日本国山城国木幡観音院灌頂道場授与伝法灌頂職位已畢

伝授阿闍梨菩薩戒比丘真空

已上一帯

血脉

大日如来乃至

寛助僧正 覚鑠上人

証印阿闍梨大業房

玄証阿闍梨闍觀房

房海阿闍梨觀想房

定意阿闍梨禪心房

実詮大法师字□房

真空上人迴心房

頼瑜大法师

已上一帯

秘密

第二重

阿闍梨位印 二手合掌二中二水屈背合入掌、真言曰

字列字列所引不列不未

第三重

五古塔印 外五古印、改頭指捻大指端、如塔印也、真言六大明

字列字列不未

已上一帯

(端卷)

仰云、此流ハ以此第三重印明為最極大事、五古印塔印不二ト一跡、是則顯兩部不二ヲ義、中名小三指外五古印、大頭二指率都婆印也、故云五古塔印也、真言中初ヲ字ヲ識大種子、余五字五大種子也云々  
又仰云、中将阿闍梨此三重印明并五重灌頂俱受、五重印明授与于金胎房覺禪、三重印明授与于禪心房定慧、淨心房定、良悟房隆盛等矣

卷五 紫金台寺 又云泉殿御室

成就院

賴瑜大法師

授印可 金剛名号

右文応二年正月十二日、於大日本国木幡觀音院灌頂道場授与伝法灌頂職位畢

伝授阿闍梨菩薩戒比丘真空在判

血脉

大日如来 乃至 真雅僧正号貞觀寺 源仁号南池

益信僧正号内城寺 寬平法皇宇多院 延喜父 寬空僧止号香隆寺

寬朝僧正号広沢 円融院行師 濟信大僧止仁和寺 喜多院 一品親王大御室 三条院第四宮

寬助大僧正号成就院 信証堀池僧正 琳助教兼房律師

心蓮理覺房 寬琳律嚴房 明任俊覺房 道範覺本房

劍覺口房 真空迴心房 賴瑜大法師

已上一番

印信  
初重  
台 外五古印

外五古印

金 塔印

外五古印

第二重  
台 外五古印

外五古印

金 塔印

歸命

第三重  
台 外五古印

第四重  
金 外五古印

台 外五古印

金 外五古印

外五古

雙円性海大事 已上二帙

雙円性海常談 四曼自性、重如月殿恒說 三密自樂、人法法尔、興廢何時、機根絶々、正像何別

塔印

き

文応二年正月十二日

伝授阿闍梨菩薩戒比丘真空

血脉

二品親王皇殿 寂忍 心蓮 寛琳 明任

道範 釵覚 真空 頼瑜

卷六 勤修寺中川方 已上二帝

秘密伝法灌頂秘印

大阿闍梨云灌頂有多種

普通大門徒之様初夜

外縛五貼印  不説

大師御口伝云

外縛五貼印  不説

普通大門徒様後夜

智拳印  不説

大師御口伝云

率都婆印不開  不説

金剛拳菩薩羯磨会印明此亦金剛界阿闍梨位密印也、此印功能說宝樓閣經下卷如許可之印中記之

已上々

金剛界伝法灌頂阿闍梨職位極密印

結路趺坐、兩手作金剛拳、左拳仰置杏上、以右拳覆置其上、真言曰

曩莫三曼多沒馱南欠

三身說法印

先自性身

智拳印 才表不表其

次心身說法印

羯磨印 金剛界一明用印也 曩莫三曼多沒馱南阿

次化身說法印

外縛二小指二天指並立 婦命婆入

胎藏伝法灌頂阿闍梨位印

二手虚心合掌屈二地二水入掌内、背相柱二風屈第二節捻二空頭也

阿尾羅吽欠

法身印

内五古印 阿尾羅吽欠吽恒洛紀里惡

応身印

如来拳印 唵僕欠

化身印

印相 印相ハノヲ定拳ヲ台拳也置腰ニ、惠羽舒五指ヲ同外辟ニ立忿婦命咩ヲ

已上々々

初夜得八葉中阿弥陀 後夜得蓮花部中法菩薩 灌頂名清淨蓮花

秘密伝法灌頂秘印

金 法界塔婆印

開大指也

鑣咩怛洛里惡

胎 虛心合掌 二風二小各開立二空並入掌内

阿々暗惡々

次淨土莊嚴印兩部合行 左拳置左腰、右拳ヲ当眉間上金剛拳也

奄縛曰羅索吃瑳麼摩訶薩怛縛咩々

次供養法 左拳仰右拳覆面相合当合行

奄縛曰羅婆布利鑣

初兩界惣供養

塔婆印開也誦二明

鑣咩怛洛紀里惡阿々暗惡々

次各別一界成

金 外五古印 鑣咩怛洛紀里惡

胎 虛心合二風二小各開立二空並入掌内 阿々暗惡々惡々

次金 内縛二中指申立合二頭指各開立誦鑲字有婦命句 已下皆同 次外縛二中指合立誦吽字 次以同印中指如宝形誦怛洛

字 次以同印中指如上節、釵形誦紀里字 次以同印中指屈入縛内二誦惡字

次胎 八葉印 唱二阿字各有小二大頭合也 各有婦命句也 次以同印二大指二小指入掌内唱暗字 次以同印如未敷蓮花形唱惡字

次以同印二頭指屈二大指ノ頭二当唱惡字

秘密伝法灌頂秘印……

大伝法灌頂大阿闍梨位印

転菴摩羅識得法界牀性智身密現毘盧遮那仏、口密現普賢菩薩、意密現不動金剛、転頼耶識得大円鏡智身密現阿闍  
仏、口密現金剛手菩薩、意密現降三世金剛、転未耶識得平等性智、身密現宝生仏、口密現虚空蔵菩薩、意密現軍  
荼利金剛転意識得妙觀察智、身密現阿弥陀仏、口密現文殊師利菩薩、意密現焰鬘得迦金剛転五識得成所作智、身  
密現不空成就仏、口密現摧一切魔菩薩亦名般若菩薩、意密現金剛葉刃金剛一切衆生無二平等、故言一成一切成所  
以仏界与衆生界無二平等、是大日如来法界率都婆身也、故云、心仏□衆生是三無差別、如此觀了灌頂。

一法界印 真言婦命阿胎藏理也 婦命鑲金界理也

二智拳印 真言婦命吽胎藏智也

三内五貼印 真言婦命吽金界智也

三身如来九等印

一法身印 虚心合掌屈二風当二空頂不相着即塔印

二法輪蔵報身印 虚心合掌地水火三指屈頭相柱風空直立合



三八大日智釵化身印

法々身真言

報法身真言

化法身真言

法報身真言

報々身真言

地水内縛二火如釵二風捻二空指

阿鑊覽含欠

唵阿尾覽吽欠

阿尾覽吽欠已上三種真言  
同用法身印

阿尾覽吽欠

(以下次回に続く)

(資料一)

「根嶺教相血脉」(略図)

